

賀川豊彦とマルコム X に見る弱者救済の思想

土内俊介・萩原八郎

Thoughts of Toyohiko Kagawa and Malcolm X to Relieve the Weak

Shunsuke TSUCHIUCHI and Hachiro HAGIWARA

はじめに

今日、わが国では社会格差が最大の社会問題の一つとなっている。社会格差とは、たとえば、富裕層と貧困層の間の搾取や支配的な構図が用いられて、諸個人の努力だけでは解決できない構造的な問題だと考えられてきた。その是正方法の根幹となるのは徴税や社会保障など政府による所得の再分配であると考えられる。これはいわゆる「公助」のカテゴリーの問題である。しかし、今日社会格差の発生原因として重要視されているのは個人の努力に起因する問題である。まずは自分自身の専門的・技術的能力の向上などの努力が求められている。だが個人の努力には限界があり、個人の能力にも限界があるため、個々人同士による「共助」の必要性を出現させる。その「共助」の例として、賀川豊彦の協同組合理論は弱者が連帯することによって状況の改善を図るものである。社会格差を是正する方法としても有用であり、賀川思想は主にコミュニタリアニズムや経済学によって再評価されている(土内他2014-1)。

賀川豊彦没後、経済発展の一方で公害問題や地球環境問題などが現代の人類にとって深刻な問題として立ちはだかつてきたことを受けて、セルジュ・ラトゥーシュは環境主義に重点を置いた経済哲学的理論である「脱成長」理論を唱えた。賀川の理論が人間同士の相互扶助に重点を置いたものであるのに対し、ラトゥーシュの理論は人間の自然環境に対する姿勢とライフスタイルに関するものであり、深刻な社会格差を生み出した資本主義に対しても疑問を投げかけている。賀川思想は物質的豊かさを追求するという観点に立っており、今日のように資源の枯渇と環境破壊が現実味を帯びている21世紀の世界に

においては、セルジュ・ラトゥーシュの環境主義的観点からの「脱成長」理論のように物質的豊かさを問い直すことによって補正する必要性が生じている(土内他2014-2)。

補正の必要があるとはいえ、賀川思想が今日の社会格差に一定の説得力を持った是正手段であることは明らかである。その一方で、賀川思想の射程が、彼が「社会悪」と呼んだ問題とその救済においてキリスト教的思想に終始している点に注意を払わなければならない¹。賀川は社会的弱者の「人権」や「生存権」といった権利を保障するためには「協同組合」経済と全人類のキリスト教徒化を進める必要があると考えていたようであり、「弱者」救済のために協同組合論を独自のキリスト教観から展開した。この協同組合論への具体的思考の発展は自らに課した義務としてのキリスト教伝道から発展したものである。

賀川がキリスト教を敬虔に信じた背景には、自身の幼少期における孤立と孤独、そして出会った母性と父性の対象となった人物がキリスト教徒であった事実がある。賀川はアメリカへの留学や世界への伝道の旅を通じて「救貧」から「防貧」へとその思想を発展させた。

「弱者」救済をキリスト教の伝道の一環として行おうとした賀川と同様に、当初はイスラム教による黒人の地位向上という限定的な運動から、最終的には包括的な思想と方法論を持つに至った人物を取り上げたい。賀川とはほぼ同時期に活動した人物であり、スパイク・リー(Spike Lee)がその生涯を映像化するまで、大衆には無視され続け、一般に知られることもなかった。幼少期にはマルコム・リトル(Malcolm Little)と呼ばれ、NOI(Nation of Islam)

に入信した時にマルコム X (Malcolm X) と名を変えた人物である。アメリカのオバマ大統領が、マルコム X の主張する「マンフッド (男らしさ)」と呼ぶものや自信、アイデンティティという考え方に強い影響を受けたことは有名である²。

現代の資本主義社会に対して、賀川は、相互扶助という高潔な理念と弱者を救済するための協同組合という具体的な経済理論を提示した。この小論では非白人を中心に教育の場を提供し専門的技能を会得させ、また社会的弱者に発言の機会を設け、その地位の向上をもって社会的弱者を救済しようとしたマルコム X (1925～1965) に着目し、社会格差の是正という視点から賀川の思想と対比して考察する。

I マルコム X に着目する理由

賀川の思想と類似し、賀川と同じキリスト教徒であり、賀川と同じく非暴力、平和主義によって目的を達成しようとした人物として、まずキング牧師 (1929～1968) の名をあげることができる。キング牧師とはアメリカ南部ジョージア州アトランタの著名なバプティスト派牧師の息子で、裕福な中産階級の出身であり、教育があって黒人たちに尊敬された。キング牧師の家族は裕福な黒人地区に住み、キング牧師の父親は新車によく乗っていた。しかし、アトランタでは人種差別が著しく、肌の色が富も教育も人間の価値さえも決める社会では、自分の恵まれた境遇も如何なる意味も有さないことをすぐに学んだ。それでもキング牧師は努力を重ね、15歳でモアハウス大学に入学し、社会学の学士号を取得し、その後ペンシルヴァニア州のクローザー神学校から神学の学士号も取得して、さらに名門ボストン大学神学部の博士課程を修了した。

キング牧師は1950年代、1960年代のアメリカの人種差別撤廃のために尽力し、雇用と教育の機会均等を求める公民権運動を指導した人物であり、1964年にはノーベル平和賞を受賞した。キング牧師はガンジーから強い影響を受け、非暴力による抵抗によってアメリカにおける白人と黒人間における人種統合を果たそうとしたが、1968年39歳の時、テネシー州

メンフィスのモートルのバルコニーで狙撃により暗殺された。彼のその偉大な功績をたたえ、1969年、コレッタ・スコット・キング婦人がフォード、GM、モービル、ウェスタン・エレクトリック、P&G、US スチール、モンサントからの出資によってマーティン・ルーサー・キング・ジュニアセンター (非暴力社会改革センター) を設立した。今日アトランタ市内に生家などと共にマーティン・ルーサー・キング・ジュニア国立歴史地区として保存・顕彰され、キング牧師の誕生日である1月15日に近い1月第3月曜日はマーティン・ルーサー・キングデーとしてアメリカの祝日になっている。

このように、賀川豊彦との共通点も多く、アメリカの歴史上の黒人の中で、キング牧師ほど尊敬されている者はいないと言っても過言ではない。キング牧師とマルコム X はしばしば引き合いに出されるが、キング牧師とは対照的に一般的には暴力的であると思われているマルコム X をこの小論であえて取り上げるのは、次の4つの「共助」に類するマルコム X の優れた主張からである。

- ① 郷土教育：マルコム X は自分たち (黒人) に関する研究を奨励³ し、自分たちの起源を知ることが周囲に呼びかけるとともに正規の教育から外れて地域に根ざした教育の必要性を強く信じていた。また、マルコム X が若い黒人たちに自分たちの社会を強化するための独学を奨励していた。これは地域に根ざした人間の育成と地域の文化を尊重する思想を推奨していたことに他ならない。
- ② 経済的自立と社会貢献：黒人たち自身による自立のためには、黒人自身による企業所有が必要であり、それを黒人の個人が社長となって運営することを奨励していた。また黒人が社会に貢献できるような知識層になることを奨励していた。
- ③ 社会的弱者による思考の確立と自己啓発：当時も今も、表面上はどうであれ黒人は社会的弱者として扱われる。そして自らの尊厳も、黒人という文化的誇りすべてに苦渋を舐めさせられている現実を、享受し続けていた。それをマルコム X は批判し、その肌の色と文化を誇った。自らの立場

について考え、自分自身について考えることを奨励した。これは黒人だけが対象となるわけではない。国家の内外を問わず、全ての弱者が対象である。自らがなぜその状況に置かれているのか、そもそもそれは誰の考えか（①と通ずるが）それらを思考すること、つまり個々人による完全に自立した思考、知的能力の向上を熱望していた。

- ④ 地域経済圏と多文化共生：白人による人種差別から自らの身を護るために黒人や非白人種による協力体制を主張した。後に①と③の条件が成立した場合には、白人との協力体制も成り立つものと考えていたようである。つまり、現在における一部の地域が統合されて創出された経済圏や多文化共生なども漠然とではあったがその思想の射程に捉えていた点。

マルコム X はイスラム教の聖地巡礼を経て黒人差別が「人権侵害」であるという事実へとたどり着いた⁴。そしてこの「人権侵害」という点が、マルコム X がキング牧師の「公民権」運動を越えてたどり着いた「人種差別」に対する答えであった。キング牧師によって思慮深く指導されたデモ行進は、黒人の「公民権」という問題の解決のためであったが、マルコム X の答えは「人権」であった⁵。

「公民権闘争をより高い段階へ引き上げねばならない。人権の問題に引き上げるのだ⁶。」

マルコム X は「公民権」も重要だがそこに拘ってはならず、その先にある黒人の「人権」の獲得こそが重要であると主張した。そして、マルコム X の死後、キング牧師も「黒人の貧しさ」とヴェトナム戦争へのアメリカの介入を「人権侵害」の視点から注目するようになった。ここからわかるとおり、マルコム X の思想的成長は著しく、問題の核心が「人種差別」から「人権侵害」へと発展している。

最終的に、マルコム X の理想はキング牧師の人種統合に基づく理想に近づいていくが、キング牧師の理想もまた、マルコム X が人種統合を構想した段階から、マルコム X の理想へと近づいていった。

先のマルコム X を取り上げる4つのポイントからもわかるとおり、マルコム X の考えは極めて先を見据えたものであった。

Ⅱ マルコム X の軌跡とアメリカ社会における黒人の現状

マルコム X は最初から黒人と白人がお互いに理解し、共に歩むことができると思っていたわけではない。NOI 時代のマルコム X は、黒人による国家成立を叫んでいた。したがってマルコム X の主張の変化は、マルコム X の人生の変遷と成長を示すものである。

マルコム X はネブラスカ州オマハで黒人民族主義者マーカス・モザイア・ガーヴィー (Marcus Mosiah Garvey)⁷ の影響を強く受けた両親のもとに生まれ、育てられた。6歳のころに父である J・アール・リトル・シニア (J Earl Little SR) がクー・クラックス・クラン⁸ に惨殺される。その後、母親のルイズ・ノートン・リトル (Louise Norton Little) が州の職員による家庭介入をきっかけに神経衰弱に陥ってしまった。そして家庭は崩壊へと向かい、マルコム X は州職員らの手でゴアンナという白人夫婦の上流家庭に引き取られる。そこで13歳まで過ごした後、素行不良で養護施設に送られることとなった。

この養護施設における生活での自分のことをマルコム X はマスコットと呼んで自嘲している。事実、マルコム X はこの当時、非常にまじめでクラスでの成績、評判、どちらも良かった。だが、白人の英語教師による進路への質問によって、マルコム X の精神は変化し始める。マルコム X が弁護士か医者になりたいと教師に告げると、教師からは、黒人にはそれは無理で、黒人らしい職に就くようにと諭された。

この一件によって、マルコム X は初めて自らが黒人であることからの緊張と不安を感じ、ニガーという呼称に苛立ちを覚え始めたのである。この頃に、マルコム X はその生涯において多大な恩恵を自らに与えてくれる異母姉エラ・コリンズ・リトル

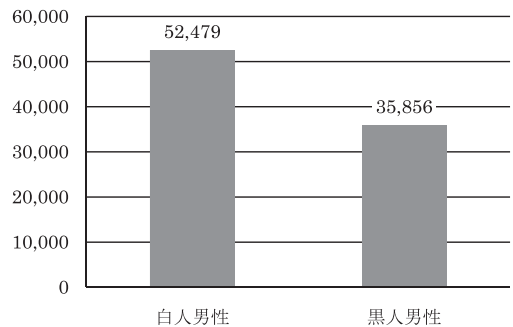
(Ella Collins Little) と出会い、エラと住むためにボストンに移り住むことになる。エラ自身はマルコム X を黒人の専門職に仕立てあげたかったのだが、マルコム X は犯罪行為によって刑務所に入れられてしまう。それでもエラはマルコム X を見捨てず、エラの尽力で環境の良い刑務所に入ることができたマルコム X はそこで猛勉強に励むとともに NOI に入信する。

もともと聡明な少年であったマルコム X は釈放後、NOI の優秀なスポークスマンとして頭角を現していく。社会の底辺で犯罪と麻薬におぼれていた多くの黒人たちは、彼の力強い演説を聞くことで黒人としての誇りを取り戻し、新たな人生を歩み始めた。しかし、マルコム X が有名になり、その発言が過激化するにつれて、批判の矢面に立たされた NOI の内部から次第に彼を排除する動きが高まった。マルコム X は1963年12月に NOI の指導者ライジャ・ムハマドから NOI での活動停止処分を言い渡される。この件についてマルコム X は1964年3月に記者会見を開き、自らの中心を占めていた NOI と決別し、その直後イスラムの聖地メッカに巡礼する。メッカ巡礼を経て劇的な変化を遂げたマルコム X は、メッカ巡礼を終えたことを意味するエル・ハジ・マリク・エル・シャボズ (EL-SHABAZZ, EL-HAJJ MALIK) に再び名を変え、さらなる活躍が注目されるも1965年2月、ニューヨークのマンハッタンのハーレム地区にあるオーデュボン・ボールルーム (Audubon Ballroom) での講演において暗殺される。

マルコム X は生涯において26回演説を行ったが、その中でも1963年から1965年、最後の数年間の演説が重要とされる。イスラム聖地巡礼後の「選挙権か銃弾か」、「オックスフォード討論」、「最後のメッセージ」においては、マルコム X が NOI の思想から遠ざかり、白人を「悪魔」として怒りと憎悪の対象として見ることを止め、犯罪の犠牲者を犯罪者にしたてあげるほどの力を持った存在こそが対抗すべき相手だと主張しており、明らかにそれまでより視野が広がっている⁹。とくに「最後のメッセージ」では公民権運動から人権運動へとさらなる発展を見

せ、白人との連帯すら主張している¹⁰。マルコム X の功績と偉業を称え、ボストンのロックスベリー・クロッシング駅の前の通りの名前がエル・ハジ・マリク・エル・シャボズ通りとなっているほか、ワシントン通りの近くに位置している公園の名前もマルコム X 公園になっている。

今日のアメリカにおいても、白人と黒人の社会格差は明確に存在している。経済格差を例にあげると、図1は白人と黒人の14歳以上の男性の平均年収を表したものである。白人男性は5.2万ドル余り(1ドル=120円換算で約630万円)であるのに対して、黒人男性は3.5万ドル余り(約430万円)で、白人男性のほうが黒人男性よりも約1.6万ドル余り(約200万円)高い。



※収入データは2013年。数値は正規非正規合算。
出典：アメリカ国勢調査局
(<http://www.census.gov/>)

図1 アメリカにおける人種別平均年収(単位:ドル)

また白人による黒人に対する暴力は止むことなく行われている。2014年に起こった白人警官による黒人少年射殺事件¹¹ はじめ数多くの白人による黒人への暴力事件が白日の下にさらされ、アメリカの人種問題がいまだ解決されることなく、社会に存在し続けていることを露見させた。それはかつてマルコム X がアラバマ州バーミングハムの通りで、黒人の少女が警察犬に襲われ、放尿されていたのを見た頃と重なって見える。しかし、その一方で前述の黒人少年射殺事件以後の抗議活動の活発化は、マルコム X がかつて望んだ黒人たちによる「人権」の獲得という問題解決を黒人たちが実現しようとしていると同時に、黒人たちと共に抗議活動に参加する白人が存

在していることから、黒人と白人たちが、かつての対立関係から徐々にではあるが協力関係へと変化しつつあることをも示している。そして、この黒人と白人が共同で一つの問題の解決に向かって取り組んでいく姿勢は、マルコム X が最後に望んだ人種を超えた人々の在り方に近い。

Ⅲ マルコム X の思想と社会格差の是正

マルコム X の主張は、現代の社会格差すらも射程に入れる。それは現代がマルコム X のいた時代から本質的に何も変わっていないことを意味している。経済学者のトマ・ピケティ (Thomas Piketty) は歴史統計的なアプローチを用いて、300年以上にも及ぶ極めて長期間の資産、資本移動を解析し、1910年から1970年までの期間を除いて富裕層の富の比率は1810年から2010年までの200年間、上昇し続けていることを明らかにした。2010年におけるアメリカのトップ10%が持つ富は全体の70%にまで及んでおり¹²、一方、日本においては非正規労働者の数は近年増大しており、2014年に2012万人を超え労働者全体の38%を占めている¹³。

日本において深刻なのはこの非正規労働者の割合が高いことである。非正規雇用は少なくとも安定的に収入を得ることができる正規雇用とは異なり、生活基盤となる収入そのものが不安定となる。企業の健康保険や厚生年金なども、大抵の非正規雇用の場合には未加入である。また、国民皆保険制度のもとの国民健康保険や国民年金の保険金納入も負担が重いことから未納となりがちである。雇用保険の失業給付の条件を満たしている場合には失業後も一定の収入を得られるが、いずれにしても支給期間は限定されている。そうすると病気や怪我などの事情があつて失業した場合でも無収入、無貯蓄という状態に陥ることになる。その状態から脱却するために新たな仕事を早急に見つける必要が出てくるため、職種も職場環境も賃金も選ぶこともできないまま、非正規労働者を続けざるをえない。日本においては、こうした経済的格差における負の連鎖が続いている。また、非正規労働者には常に精神的にも相当な

負荷がかかるという精神的圧力の格差が正規労働者と非正規労働者には存在している。

ピケティは自由な市場では格差は拡大するとしており、その是正に世界の資産、富に対するグローバルな課税を提案している。これは市場によって生み出された富の偏在を若干再分配することによって是正するという考えであり、実行に移すことができれば格差是正の有効な手段である。ピケティは課税という「公助」システムを用いることによって社会格差の是正を提案している。しかし、「公助」だけでは不十分であり、これを補う「共助」が必要である。主に政府による「公助」と様々な利害関係や地域単位などによる「共助」は相互補完の関係にある。「公助」という静的な構造物は、その構造上、恐慌などの急激な社会変動への対応が必ず遅れる。一方、「共助」はそれを構築するもの自体が共同、協働、協同、という個々人間の連帯によって成り立っている。したがって恐慌などに対して個々人の意識が高い場合においては、即応しやすい利点がある。

この「共助」をシステム化した例が賀川の「協同組合」論であり、賀川は「協同組合」論をもとに戦後、1945年11月17日、日本協同組合同盟を創設した。一方、マルコム X の場合においては1964年6月28日、NOIを離脱後、アフロ・アメリカン統一機構(OAAU: Organization of Afro-American Unity)と呼ばれる新しい組織を創設した。この組織は「公助」の面においてはアフリカの人々とディアスポラ(離散者)が、その社会経済的、宗教が異なっても、権利を行使できる政治的场所を提供することを目的として作られた。また、あらゆる人種との連携から自由を求めることが視野に入れられている。そのような経緯からキング牧師によって指導された「公民権」運動を支援した。「共助」の面ではこの組織の独立した教育部門アフロ・アメリカン統一機構開放学校を開校させ、OAAUの会員や非会員、老若男女を問わずに実技教育や市民教育を行った。すなわち、アフリカとアフリカン・アメリカンの歴史や政治の授業、消費者の知恵を高めるための実践講座、また夫婦を対象とした家族計画や家事などの現実的な生活面に焦点が当てられていた。これら教育の目

的は地域に基盤を置いた教育によって生産的な世界市民を生み出すことであった。

まとめ

マルコム X のこのような構想は賀川主導によって展開された協同組合などの弱者救済事業と同様に総合的であり、目標もほぼ同様に構造的な貧困、差別の根絶という規模の大きなものであった。そのため独自の学校を有する点においては、賀川とマルコム X は類似している¹⁴。また、人々の繋がり的重要性を強調している点も賀川とマルコム X が共通している点である。

賀川は協同組合論を用いて経済そのものを協同組合化させ、人々の行動原理をキリスト教化することで貧者のいない和合を持った社会ができると信じていた。一方で、マルコム X は貧富などの社会的境遇や宗教といった相違を容認することで多様な価値観を伴った人々の多文化共生と、地域と生活に密着した生産活動を通じ弱者救済を行おうとしていた。社会経済的境遇、宗教の相違を問わないマルコム X の進化した考え方は、賀川の「協同組合」論と軌を一にするものであり、より自由で開放的な思想であるといえる。その意味で、マルコム X が自身の成長の末にたどり着いた開放的な社会運動の思想は、社会格差の是正において賀川を思想を補強するものとして有用であると考えられる。

注・引用文献

- 1 賀川独特の壮大な宇宙哲学でもある世界観において、この世に存在する闘争、苦痛、死などを「宇宙悪」と呼び、その「宇宙悪」と並んで最も力を注いだのが「社会悪」と呼ぶ問題である。賀川によると、社会に見られる貧苦や病苦を指している。「宇宙に大きな秘密がある。私が弱者貧民のために生命を棄てる其中に私は一つの宗教を発見したのである。十字架の精神！何よりも第一に之を解明し、之に生きることが急務である。即ちイエスは……（中略）……苦しめる者は縋^{ひき}り、痛める者を癒す人格の白血球運動者として自らの使命を自覚せられたのである。」と述べているように、「社会悪」の救済の中核にはキリストの十字架が存在している。参考文献（3）p. 18
- 2 オバマ大統領が1995年に著した自伝においてこのことを語っている。参考文献（4）
- 3 一般的にブラックスタディーズと呼ばれる黒人研究の始まりは、マルコム X が1960年代に行った演説による影響である。参考文献（5）
- 4 マルコム X はイスラム教の聖地を巡礼している時、肌の色に関係なくムスリム（イスラム教徒）と共に礼拝している姿を目撃し、ムスリム同士による人種差別がないことに衝撃を受けた。そしてこの事実からアメリカの黒人と白人は連帯することができるのではないかという期待を抱いていくことになる。参考文献（6）
- 5 参考文献（6）pp. 458-459
- 6 参考文献（7）p. 303
- 7 マーカス・モザイア・ガーヴィー（1887～1940）はジャマイカ出身の黒人民族主義者。正規の教育をほとんど受けずに育ったが、アフリカ関連の出版社で働く間にアフリカと黒人奴隷の歴史研究に目覚め、カリスマ性を発揮して1914年に UNIA（Universal Negro Improvement Association：世界黒人地位向上協会）を組織した。第1次世界大戦の終わりにはアメリカに30以上の支部を持っていた。1920年ニューヨークで開催された同組織の第1回会議の際にアフリカ国家建設構想を発表し、黒人民族主義の広がりとともに UNIA の支部はアメリカを始め世界40ヶ国以上に展開した。しかし郵便法違反で5年の刑を受け、アトランタ刑務所で刑期を半分終えたところで1927年ジャマイカへ国外追放となった。1935年までジャマイカで政治改革に取り組んだ後、1940年イギリスでひっそりと死去した。ガーヴィーの思想の中心は黒人による経済的独立とアフリカの統一、黒人は祖国たるアフリカに帰るべきだとするナショナリズムである。マルコム X の父親はガーヴィーの思想に強く心酔していた。参考文献（4）p. 170
- 8 KKK（Ku Klux Klan）は、南北戦争終結後の1865年12月にテネシー州で結成された南軍の退役軍人たちの友愛組織であったが、すぐに南部を占領統治していた共和党の再建政府を打倒しようとする集団へと変貌する。その後「白人至上主義」の性格を強めていく中で、暴力や脅迫に依存しながらその存在を正当化した。1920年から25年にかけて絶頂期を迎え、そのイデオロギーは幅広い人種差別主義に基づき、反カトリック、反ユダヤ、過激な反黒人主義をとり、純粋なアメリカニズムではないもの全てを否定した。その後、しばらく休眠状態が続いていたが、戦後の公民権運動の高まりに危機感を覚えた人たちによって復活したものの、かつての勢いは取り戻せなかった。
- 9 参考文献（6）p. 163
- 10 参考文献（6）p. 167
- 11 2014年8月にミズーリ州セントルイス郡ファーガソンで起きた白人警官による丸腰の黒人少年 Michael

Brown (18) 射殺事件。

12 参考文献 (7) p. 363

13 数値は独立行政法人 労働政策研究・研修機構 (JILPT) から引用。

14 賀川豊彦は43歳の時に松沢幼稚園を、44歳の時に武蔵野農民福音学校を、45歳の時に日本協同組合学校をいずれも東京に開設した(参考文献(8) p. 51)。また、神奈川県にある平和学園創設にもかかわった。これらは全てキリスト教色の非常に強い学校であった。農民福音学校は講師費用の全額と生徒の食費の半分を賀川自身が負担していたが、戦争勃発によって閉鎖された。

参考文献

(1) 土内俊介・萩原八郎(2014-1):「賀川豊彦の再評価に関する一考察」, 四国大学紀要人文・社会科学編第42号, pp. 95~98

(2) 土内俊介・萩原八郎(2014-2):「セルジュ・ラトゥーシュの「脱成長」理論について」, 四国大学紀要人文・社会科学編第43号, pp. 111~115

(3) 隅谷三喜男(2011):『賀川豊彦』, 岩波書店

(4) 荒このみ(2009):『マルコム X—人権への闘い』, 岩波書店

(5) ロバート・L・ジェンキンズ(編著)・荒このみ(訳)(2008):『マルコム X 辞典／原題 The Malcolm X Encyclopedia』, 雄松堂出版

(6) Alex Haley (著)・Malcolm X (著)・Paul Gilroy (序論)(2001): The Autobiography of Malcolm X, Penguin books Ltd.

(7) トマ・ピケティ(著)・山形浩生他(訳)(2014):『21世紀の資本／原題 Le capital au XXIe siècle.』, みすず書房

(8) 賀川豊彦(2012):『協同組合の理論とその実際』, 日本生活協同組合連合会

